

球磨川の下流から

荒瀬ダム問題を考える

—連載その⑤

つる 詳子 (環境カウンセラー)

ダム建設前の球磨川とアユ漁

今年も、去年より3日遅れで稚アユの掬い上げ作業が、球磨川最下流の球磨川堰で始まりました。冬場を八代海の浅瀬で過ごした稚アユは3月の中旬ごろ球磨川を遡上しますが、荒瀬ダム建設後高い堰堤を遡上することができなくなり、球磨川漁業協同組合(以下、漁協)により掬い上げ事業が始まりました。球磨川堰の魚道を上ってきたアユは、コンクリートで囲った小さな網池に落とされ、ここで掬い上げられ、トラックに乗せられて、上流の30数カ所で放流されます。

この事業に毎年約5000万円が費やされています。荒瀬ダムの発電による純利益は毎年3000万円もあります。電力不足の建設当時、ダムがアユ漁とその関連産



ダム建設前の球磨川(ダム下流、下代の瀬付近)

業が地域にもたらしていた経済効果にこれほど影響があると誰も予測することが不可能でした。球磨川のアユに依存して生計を立てていた多くの流域住民は、建設後、電気という県民の利便性と引き換えに失った

もの大きさをじわじわと知らされることになったのです。

ダム建設前の球磨川

球磨川沿川に住む60歳以上の人たちにダム建設前の球磨川のアユについて聞く

「深い淵の底まで見えるように球磨川の水は澄み切っていたが、アユの季節になるとアユで真っ黒になって見えなかった」「水面を棒でたたくとアユが5〜6匹プカプカ浮いてきた」「石を投げるとアユに当たった」「服を着て泳ぐと、ポケットにアユが入ってきた」「石の蔭に休んでいるアユは、手で捕まえていた」と、如何に沢山のアユがいたかという話には、枚挙にいとまがありません。昔を知らない人が聞けば、漁師の大ボラのようにしか聞こえない話ですが、球磨川の上流から下流まで同じような話を聞くことができます。

しかし、捕っても捕っても捕りつくせないくらいのアユがいたことは確かかなようです。流域には、2000名を超える専門漁師がいましたが、多くの証言からすると、1シーズン約半年で、サラリーマンの1年分の給料を稼いで、7〜8人の家族を養っていたといえます。また、小学校の2〜3年から、アユやウナギ捕りを覚え、高学年になるとそれを売って、小遣いだけでなく、学用品代や授業料の足しにしていました。

坂本町に住むMさん(72歳)もそんな子供の一人でした。夜のうちに仲間を誘って、10個ぐらいのウナギ籠を仕掛け、朝早くから上げにいくと、全部で1貫目(約4kg)ぐらいのウナギがかかっていたので、それを売りにいくと、当時のお金で6〜7千円になっていたと言いますので、小遣いどころではありません。

八代市に住むMさん(67歳)も専門漁師の家に生まれ、子供のころからウナギやアユを捕って小遣い稼ぎをしていましたが、24歳で専門漁師になります。やはり、夏場の漁期だけで1年分を稼いでいました。八代市内の前川堰付近を漁場にしており、多い時には、3〜4日で200〜300kgを捕っていました。日雇い労働者の日当が2000〜2500円の時代、アユは1kg2000円前後の高値で売っていました。そ



球磨川堰における掬い上げ風景。稚アユは、人の手によって、上流に放流される

のころの球磨川について、Mさんは、次のように述べています。「モクスガニ、ダクマエビ（テナガエビ）、ハエ（オイカワ）、なんでんいっ

では想像できないくらい多くの種と数の生き物がいたことは間違いありません。

坂本村のアユ漁

ばいおった。黒い縦縞のあるシマエビやアユカケなんとかという大きかドンコみたいなのもいっぱいおったばってん、全く見らんごつなつた。砂洲にはヤツメウナギがいっぱいいて、川の淵にはギロ（ハゼの仲間）がびっしり、上流の方ば向いてくついついおった」とにかく、今

荒瀬、鎌瀬、瀬高、下代瀬、佐瀬野と、その地名が示すように、坂本村（現在、八代市坂本町）内には多くの瀬があり、それぞれが良好な漁場を提供していました。特に坂本村には5カ所の瀬張り漁場（ア

バ）があつて、荒瀬はその中でも、広い瀬があり村一番のアバとなっていました。アユの時期に、川の真ん中に孟宗竹などの枝を利用して障害物をつくり、アユが川岸によつてくるように仕掛けをして、それを捕える漁法です。9月の彼岸ごろから11月いっぱい行います。ダムサイトに住むささん（79歳）も、荒瀬地区12軒で行っていたアバ漁に若い時から参加してきました。会社勤めをしていたSさんですが、アバ漁が始まると父親から「今日は休め」と駆り出されます。一番多い時で、1日130貫目（約490kg）捕れた記憶があります。会社の一般社員の給料が40円、見習いのSさんの給料は28円だったその頃に、4〜5回手伝つて、100円ぐら

いもらっていました。給料は全部家に入れていましたが、2カ月のアバ漁で稼いだ給料以上の金額は小遣いでした。荒瀬ダム建設前の昭和27年、坂本村内には、

297名の鮎掛け漁師がいたと「坂本村誌」には記録されています。ウナギはアユよりも高く売れていました。ドンコ、カワガニ等の漁も含めると、漁や関連産業が多くの経済効果を坂本村にもたらしていたことを想像することができます。

その「坂本村誌」によると、明治26年の坂本村内におけるアユ漁獲量は5841貫目（約2.2トン）、価格にして2790円85銭（小学校教諭の初任給5円の頃）という記録があります。明治32年において、アユ漁師（鮎掛け、船打網、歩打網含め）は127名と記録されていますので、この頃もやはりサラリーマンの4〜5倍は稼いでいた計算になります。明治から昭和20年代まで、そう大きな河川改修は行われなかつたと思われまので、ダム建設前は、川を真っ黒に染めるぐらいの遡上があつたという話も納得せざるをえません。

「千反の投網」

荒瀬ダム建設前は、アユだけでなくスズキ、ボラも荒瀬ダムより上流まで遡上していました。球磨川河口の漁師は、それを追つて一勝地、人吉付近まで上つていきました。特に八代の千反地区の漁師は「千反の投網」として知られていました。10艘ぐらいの船団を組み、米、塩、味噌を船に積み込むと、多くの場合夫婦で乗り込み、何日も連携した投網漁を行いながら上つていきます。千反の投網は、普通のアユ投網と違って、広く、重たいものです。それをわずるか幅1.5m、長さ8mばかりの船の上で投げるのですが、着水する瞬間に広がるのではなく、深い川底でも届く時に一番広がるように投げるその技術は、流域のアユ漁師をも驚かせていました。

の漁師さんとのトラブルはなかったのですか」と、この漁に参加していたTさん（73歳）に聞くと、「でらんだい。捕っても捕つてもおつたのがアユたい。」——答えるその顔に今でも千反漁師としての誇りを見ることができます。

ダム建設前まで、想像を超える自然資源をもたらしていた球磨川の恵み。球磨川の補償金5000万円を含む他ダム（瀬戸石ダム、市房ダム、遥拝堰）の補償金総額約1億7000万円が安いのか高いのか、ダムの環境に与える影響は何も分からなかつた時代、誰も評価することはできませんでした。アユや他の生き物、河川生態系への影響は、ダム建設10年後ぐらいから徐々に現れ始めます。

【つる・しょうこ、環境力ウンセラー、八代市】

よその漁場荒らしとも思えるこの漁法に、「上流

（つる）

つるさんのブログ「荒瀬ダムと川辺川ダムの現場から」
<http://kumagawa-yaisirikai.cocolog-nifty.com/>